

# 東照宮（社）祭礼の祭式と渡御行列の渡物

## —和歌祭の復興芸能（棒振り・獅子・童子）を中心として—

### Toshogu Shrine ritual ceremony and pilgrimage procession's Watarimono

—Focusing on Reconstruction performing arts (BOFURI, SHISHI, and DOJI) at the WAKAMATSURI festival—

吉村 旭輝<sup>1</sup>

<sup>1</sup>和歌山大学紀州経済史文化史研究所

紀州東照宮の例祭である和歌祭は2022年に四百年式年大祭を迎える。この記念事業の一環として渡御行列の渡物である棒振り、獅子、童子が復興を遂げる。本論文では東照大権現を祀る東照宮の祭式である山王一実神道での渡御行列を概観した上で、和歌祭での復興芸能を中心に東照宮祭礼での渡物の構成とそれぞれの役割と歴史を明らかにした。

また戦後、和歌祭のフェスティバル化による御旅所の喪失、またパレード化による諸芸能の喪失から平成での和歌祭保存会青年部（現実行委員会）による復興等、ここでとりあげた復興芸能が少子・高齢化等が進展するなかで、かつての和歌祭の担い手であった旧城下町民にどのような影響をあたえるかを論じている。

キーワード：祭り、祭礼、芸能、復興、和歌祭、東照宮祭礼、祭式、渡御行列、渡物

### はじめに

2022年（令和4）、紀州東照宮の例祭である和歌祭は四百年大祭を迎える。和歌祭は徳川家康を「東照大権現」として祀る東照宮祭礼にあたる。家康の墓所である日光をはじめとする全国の東照宮では家康の神忌ごとに大祭が行なわれてきた。とくに1665年（寛文5）の五十回神忌祭以降は50年ごとに行なわれる大祭となっており、和歌祭以外の全国の東照宮では2015年（平成27）に四百回神忌祭となる四百年式年大祭を終えたばかりである。とりわけ日光東照宮では宝物殿の造替、また甲冑の新調等1年間にわたって盛大に行なわれた。

しかし紀州東照宮では、「徳川家康公四百年顕彰記念年」の幟を掲げたのみで、四百年大祭は7年後の2022年に開催されることになっている。この7年の遅れが生じた原因は、約100年前の三百年大祭以降の変化に起因する。紀州東照宮でも三百回神忌を迎えた1915年（大正4）に、大祭を迎える予定であった。しかし前年の台風による社殿の修復、また開催資金の難渋等もあり、この年は御関船の復興と仮装行列、そして和歌山市内の市電を動かしていた和歌山水力電力会社による和歌山市内中心地である京橋のイルミネーションによる前夜祭のみが行なわれ、祭礼の主体となる渡御行列を行なうことはかなわなかった<sup>[1]</sup>。また、社殿の修復をまって、紀州徳川家および元紀州藩家老家で男爵の三浦英太郎等旧家臣団の寄付金によって1920年（大正9）に徳川頼宣の「藩祖入国三百年祭」として行な

われた。

そして1965年（昭和40）に紀州東照宮では三百五十年大祭が行なわれたが、当時和歌祭の渡御行列自体が和歌山市商工まつりのメインイベントとなっており、また御旅所もなくフェスティバル化された状態であったため、特段注目されることはなかった。

こうしたことが背景となり、和歌山では家康の神忌よりも近代以降は和歌山独自の展開を見せており、紀州東照宮創建四百年の式年大祭が2021年秋に、また四百年大祭は2022年に和歌祭四百年を祝う大祭として催行されることになっている。

この和歌祭四百年大祭は前回の三百五十年大祭とは様相が異なる。三百五十年大祭が行なわれた当時は先述のとおり御旅所もなくフェスティバル化された状態であったが、1984年（昭和59）を最後に商工まつりも終了し、平成に入ってから和歌祭保存会青年部（現実行委員会）を中心に「和歌祭は和歌の浦で」の合い言葉で神事性を見直し、また商工まつりで失われた芸能の復興等が盛んになっていった。四百年大祭はそのなかで行なわれるため、神事性をともなった戦前以前の和歌祭と、商工まつりで行なわれていた和歌山城周辺への「行列」を融合させた計画となっている。その記念事業の一環として和歌祭の渡物で、近年失われてしまっていた棒振り、獅子、童子の三芸能が2021年の和歌祭から復興を果たす。

ここではこの復興芸能を中心として、和歌祭の祭式

をあらためて見なおし、復興する芸能が渡御行列でどのような役割を担っていたのかを東照宮祭礼の祭式である山王一実神道の観点から再考を進めたい。

## 1. 東照宮祭礼の祭式と山王一実神道

日光東照宮をはじめとする全国の東照宮（社）は、1616年（元和2）4月17日に死去した徳川家康を祀るため、諸藩の大名が中心となって建立されていった<sup>[2]</sup>。そのもっとも早い事例は家康の十男で、当時駿河国駿府城主であった徳川頼宣によって造営された久能山の神廟本地堂、神楽堂、御供所、楼門、鳥居等のちの久能山東照宮となる家康の廟所の建立である。この廟所建立は家康の遺言によるもので、この遺言は死の前日に徳川家の正史として記された「台徳院殿御実記」（『徳川実記』）や崇伝の日記である「本光国師日記」、また家康の葬儀を取り仕切るようになる豊国社神龍院の社僧である梵舜の「舜旧記」等にも記されている<sup>[3]</sup>。とりわけ「本光国師日記」に記された「臨終候ハハ、御体をハ久能へ納、御葬礼をハ増上寺ニて申付、御位牌をハ三川之大樹寺ニ立、一周忌も過候て以後、日光山ニ小キ堂ヲたて、勧請し候へ、八州之鎮守ニ可被為成との御意」は広く知られている<sup>[4]</sup>。また、梵舜は豊臣秀吉の葬儀を中心的に行なっており、家康の葬儀も中心的に行なった人物である。梵舜は吉田兼右の子であり、吉田唯一神道を主張していた。梵舜は秀吉を「豊国大明神」として祀った事例を挙げ、家康の神号も「大明神」にするべく、「大権現」を主張する天台座主の天海と論争を繰り広げている。結果的には天海が主張する「東照大権現」に決定し、以後天海を中心とした祭式で家康が祀られることとなる。この経緯は別稿ですでに述べているため、深くは論じないが、天台座主である天海はかねてより天台宗の護法神として位置づけられている日吉社（現日吉大社）を中心とする山王神道を主張していた。

日吉社は天津宮の守護神として三輪山から天智天皇が667年（天智天皇6）に勧請した大己貴神を大宮（西本宮）として、また比叡山あるいは八王子山の地主神・大山咋神を二宮（東本宮）として祀った社である。また、最澄が比叡山に延暦寺を開くと唐の天台山国清寺が地主神として「山王弼真君」を祀っていることに倣い、天台宗の護法神として、この二神を「山王」として祀るようになる。その後延暦寺ではこの両神を「山王」と称した大宮と二宮、そして聖真子を加えた山王三聖、またその三神に客人（白山姫）、八王子（牛尾）、十禅師（樹下）、三宮を加えた山王七神を祭神としている。さらに山王神道では中七社と下七社を加えた山王

二十一神を中心とした神道で、天台宗やのちの修験道と結びつくことで、大宮＝釈迦如来、二宮＝薬師如来、聖真子＝阿弥陀如来といった本地仏が制定されて、神仏習合の形態が整えられていった<sup>[5]</sup>。

この山王神道の形態に東照大権現を加えたのが天海による山王一実神道の創始である。山王一実神道は、これまでの山王神道における山王二十一神の頂点に東照大権現を「法華一実に戻す」という教義の下で配されたものであり、大宮と二宮を包含した習合形態として、山王権現、そして阿弥陀如来の守護神である摩多羅神とともに祀る新たな形態であった。この山王一実神道が根本となり、中世以来の天台宗の拠点であった日光山に東照社を建立し、家康の神柩が久能山から日光山へ移葬されたのち、御三家をはじめとする各大名が東照社を勧請していくことになる。このことは家康への追悼の意だけでなく、とくに外様の大名は服属の証として、こぞって勧請するようになっていく<sup>[6]</sup>。

## 2. 東照宮祭礼と渡御行列

### 一和歌祭と日光東照宮御神忌祭一

#### 2.1 徳川家康の死と小祥祭

前掲の徳川家康の遺言のなかに「一周忌も過候て以後、日光山ニ小キ堂ヲたて、勧請し候へ、」と記されている<sup>[7]</sup>。家康の遺体は死去した当日久能山へ移された。その一周忌の後に日光山へ遷されることになっていた。日光山は1613年（慶長18）に家康が天海を日光山貫首に任命した場所であり、中世以来の関東における天台修験の一大拠点であった。その場所に家康を葬ることは天台宗および山王一実神道の修法によって真南にあたる江戸の鎮守の意味だけでなく、関「八州之鎮守」となることを意味する。

家康の死の翌年にあたる1617年（元和3）3月15日、いよいよ日光へ家康の神柩が遷される。同日の「台徳院殿御実記」には次のように記されている<sup>[8]</sup>。

かねては三年が間。久能山に 神霊を安置し。宰相頼宣卿の祭祀を受給ひ。その後日光山に御垂跡あるべしとの御あらましなりしかど。三年を待せらるべきにあらずと思召旨有て。頼宣卿へ議せられ。日光山 神廟経営をいそがせ給ひしかば。この程はや成功せしにより。けふ 神柩を發行せらるべきに定まる。

このように日光山の神廟が完成したことから徳川頼宣によって神柩（霊柩）を日光山に移す指示が出され、この日から約1ヵ月をかけて日光山までむかうことと

なる。この具体的なルートも別稿で記しているため、そちらを参照されたい。なお、この時の行列は藤原鎌足の多武峰での改葬を前例とし、家康家臣300騎と雑兵1,000人が従っての大行列であった。また、各御旅所では重臣が訪れ、法会や曼荼羅供が執行された。そして神輿が日光山に到着し、日光山ではじめて行なわれた東照宮（社）祭礼が4月17日の小祥祭である。この祭礼は家康の一周忌の法会および祭礼にあたる。前日の16日の夜には天海による密法が修められ、また朝廷からの使者より追号、贈位の勅が宣下され、翌17日の小祥祭では渡御行列が行なわれた<sup>[9]</sup>。これら一連の法会／祭礼は同時期の行列を記した記録はなく、のちに編纂あるいは記されたものしか残されていない。ここではのちに『元寛日記』等をもとに編纂された「台徳院殿御実記」の17日の記録を挙げておく<sup>[10]</sup>。

○十七日 御宮にて小祥の御祭あり。御東帯にて詣給ふ。御輦の御簾は高倉右衛門佐永慶。御太刀吉良左兵衛督義彌。御刀は酒井下總守忠正。御裾は永井信濃守尙政役し。大澤兵部大輔基宥奉幣す。土井大炊頭利勝。太田攝津守資宗等供奉す。尾張宰相義直卿。駿河宰相頼宣卿。水戸少將頼房朝臣。藤堂和泉守高虎。其外諸大名ことごとく参列す。御祭は巳刻を以て始行はる。その行列。鳥甲着百人。金欄の直垂にて鉾をもつて二行に列る。次に天狗面かけし者一人。次に大獅子二匹。次に僧侶八人。金欄の直垂大口を着し。二人は立烏帽子を用ゆ。笛一管。太鼓持三人は白張。次に太鼓二。笛二。釧持二人。巫女八人。白衣を着し鈴を持。次に騎馬の僧一人。次に騎馬の神人四人。次に神馬三匹。紅厚總白切付。梨地金御紋の鞍。覆笠。障泥虎皮。次に銃百挺二行。猩々皮雨覆。次に弓百張二行。虎皮空穂。持夫は黒縹珍羽織。天鷲絨の脚半をつく。次に鎧百本二行。持夫は金紋羽織を着す。次に武者百人二行。黒實に緋威の金甲。前立物金輪。貫梨地の太刀を佩たり。次に兒廿人二行。剪綵花を簪とす。左は黒縹子の直垂。右は赤縹子の直垂。様々の縫物す。次に社人六十人。黒白の縞の衣。猩々皮の羽織。菖蒲草の袴をつく。次に軍配圍扇四本。紗地に御紋を縫たり。次に黒袍の神主馬上に太刀を佩行。一人は神釧を錦袋に入れて背に負。一人は御旗を錦袋に入れて負たり。次に御旗八本。次に猿面をかけ。猩々皮の羽織きたる童子卅八人。次に猿卅三匹。各色の衣を着せし猿引卅三人も各色の衣を着て。笛鼓を携て拍子す。次に造り獅子二匹。次に兒八人二行。冠に金欄の

直垂を着す。次に兒五十人。鳥甲に剪綵花をさしはさむ。次に大太鼓二。次に鐘二。白張これをつ。次に白張百人二人二行。次に黄直垂百人二行。次に黄衣僧十人。次に鷹の造物十二据二行。次に御手鷹二据。萌黄の狩着衣たる鷹師二人これを臂にして。御宮前にてこれを放ちさらしむ。次に松平右衛門大夫正綱。秋元但馬守泰朝。東帯。次に神輿。舁夫數十人。白張なり。御跡より神主十人。次に素襖着の侍百人二行。次に麻の上下着たる侍百人二行。次に太鼓一。次に黄衣僧五十人。次に山王権現神輿。白張數十人これをかく。次に素襖着五十人。上下着五十人。次に太鼓一。次に摩多羅神。輿舁夫上に同じ。次に素襖着五十人。次に上下着五十人。次に太鼓一。次に山伏八人。白衣錫杖をもつ。次に山伏十六人。篠懸にて金剛杖をもつ。次に山伏五十人。篠懸にて貝をふく。是より後この式を以て永制と定らる。

このように鳥甲着→天狗面→獅子→僧侶、そして巫女とつづき、中略して最後に東照大権現、山王権現、摩多羅神の3基の神輿がつづく。「台徳院殿御実記」に記された「僧侶」は『元寛日記』では「坊主楽人八人」、また後世に記された「日光山祭典沿革攷」（1863年（文久3））には「田楽八人」となっており、定かではない<sup>[11]</sup>。しかし、1639-40年（寛永16-17）に成立した「東照社縁起」には渡御行列に加わる田楽法師が描かれており、このころには雅楽を奏す僧侶ではなく、確実に田楽が出ていたことが考えられる<sup>[12]</sup>。このことについて高藤晴俊は「神輿渡御の供奉の種目や御道具類は、元和3年の当初から完備されていた訳ではなく、御鎮座以後、徐々に整えられていった。」と述べており、「東照社縁起」が成立する時期までにそれが完了したことを示唆している（高藤、2003）<sup>[13]</sup>。このように徳川家光の命による1634年（寛永11）の大造替による整備により渡御行列が完成したと考えられる。そのため、「台徳院殿御実記」は、のちの御神忌祭の基本的な渡御行列を記したことも考えられる。

なお天狗面→獅子→田楽の形態は、平安時代後期の「年中行事絵巻」に描かれた祭礼行列、また全国の多くの祭礼にもみられる神輿渡御の先導および露払いを行なう行列である。類似する和歌祭の先の渡物を事例に山路興造は京都北野神社（現北野天満宮）の祭礼絵巻を挙げて「平安時代後期以降、鎌倉時代に成立していた貴族たちがスポンサーとして執行されていた大社寺祭礼の定型」として「古典的な芸能者群で構成するという意図があった」と述べている（山路、2013）<sup>[14]</sup>。

なお、天台宗でこのころ重視されていた法会である常行三昧堂修正会では、天狗面と類似する面をかけた「ノット（祝詞）」や出座する摩多羅神の露払いとして「田楽」が登場する（吉村，2011）<sup>[15]</sup>。とりわけ田楽は山王神道における八王子が8人の童子形をしており、この童子形が田楽で大宮を饗応したことが起源とされていた<sup>[16]</sup>。そのため、山王一実神道によって摩多羅神の神輿が東照宮祭礼に登場したことで、祭礼での定型の渡物という意味を超えた教義的な重要な意図がそこに込められていたことが考えられる。

## 2.2 和歌祭の創始

1617年の日光での小祥祭の後、1619年（元和5）に徳川頼宣は紀伊藩主として紀伊国に入国する。その頼宣が二年後にとりかかったのが和歌の浦に東照社および天曜寺を建立することであった。この一社一寺は、天海を90日間逗留させ、初代別当として神事や法会の整備を執行させ、翌1621年（元和7）に完成した。その翌年にあたる1622年（元和8）に創始されたのが東照社の例祭である和歌祭である。この和歌祭は創始された時の貴重な記録とされる行列次第書の写が残る東照宮祭礼である<sup>[17]</sup>。

この祭礼の編成は、豊臣秀頼が主催者となり、内容は梵舜、板倉勝重、片桐且元らが中心となって組み上げ、さらにそれを家康の「御意」によって開催した1604年（慶長9）8月14日の豊国秀吉七回忌の祭礼である豊国神社臨時祭礼が先行事例として考えられる<sup>[18]</sup>。この祭礼の開催は倉地克直が「家康にとっては、自己の神格化をも視野に入れた、『公儀の神』をめぐる、いわば一つのトレーニングであった」と述べたようにのちの家康自身の神格化をにらんだもので、こうした意向をのちに頼宣がくみ取ったことが考えられる（倉地，1996）<sup>[19]</sup>。その証拠に和歌祭に登場する田楽や和歌山城下町民の練物としての参加は、豊国神社臨時祭礼に出勤した田楽法師や祭礼翌日に行なわれた総勢1,500人以上の京都町衆による風流踊がその先行事例となっているといえよう。

和歌祭の創始期の記録は天曜寺の名をあらためた雲蓋院に所蔵されている「和歌東照宮御祭礼之次第書」に記されている<sup>[20]</sup>。その内容からは個別の行列立てが記され、祭礼の全貌を把握することができる。その行列立ては大きくわけて「先の渡物」、「練物」、「後の渡物」で構成されている。ここでは渡物の部分を挙げておく。

### 和歌東照大権現御祭礼

壹人 棒ふり （鬼ノ面に小金剛の羽織  
緞子のたち付）

壹人 黒棒 黒装束  
三人 獅子  
八人 田楽  
貳人 八乙女并三人神楽男  
〈中略〉

- 一 三拾八人 面掛ケ  
内拾人ハあさきの単物、金欄の羽織  
拾人ハいろゝゝの染小袖、錦木の羽織  
拾人ハすりはくの単物、とんすの羽織  
八人ハあかねの単物、こまき袖無羽織
- 一 七人 御ほこ 出たち素袍袴
- 一 三人 御劍
- 一 拾五人 武具六具よろい おもいゝゝゝ  
の出たち
- 一 九人 御神馬三疋 是ハ白はれ
- 一 貳人 御鷹二もと
- 一 三人 御鉄鉄炮 是ハ素袍はかま
- 一 三人 御やり 是ハ素袍袴
- 一 三人 御弓 是ハ素袍袴
- 一 三人 御長刀 是ハ素袍袴
- 一 三人 御太刀 是ハ布衣の装束
- 一 三人 御幣 右同しやうそく
- 一 壹人 神主乗馬
- 一 六人 とくじ
- 一 貳人 たいこ 是ハ素袍袴
- 一 東照大権現御輿 昇人三拾人白はれ  
御供三拾人素袍袴ゑぼし
- 一 山王権現御輿 昇人三拾人白はれ  
御供侍二十人ゑぼし
- 一 摩陀羅神御輿 昇人三拾人白はれ、  
御供侍二十人ゑぼし
- 一 貳人 たいこ 是ハ素袍袴
- 一 拾人 こゆいの衆
- 一 拾人 僧衆乗馬  
町奉行衆  
安永七戌戌年八月写之

渡物は日光山の小祥祭の記録と類似している。その特徴は日光にはない城下町民が出した練物が出ていること、また畿内の大社を中心に出勤していた専門の田楽法師が行なっていた「田楽」および、京都の御霊会で非業の死を遂げた御霊の依代として発展した疫神鎮めの祭具である「劍鉾」が、「御ほこ」として渡物で出ていることである。これらはいずれも畿内で多くみられる芸能であり、「僧伶」や「御旗」として「台徳院殿御実記」に登場する呼称は、遠く離れた日光ではそれ

が何なのかわからなかったことが考えられる。いずれも畿内で多くみられる芸能であり、いち早く整備された和歌祭から移入されたことも考えられる。このことは別稿で具体的に論じているためそちらを参照されたい(吉村, 2017)<sup>[21]</sup>。

ここでとり挙げた渡物は、現在の日光東照宮の春秋の例祭にも踏襲されている。この渡御行列の大名および旗本等が務める部分以外の諸役は、日光門前に住む日光山の宮仕および神人が務めていた。そのため和歌山城下町民が務めていた練物が和歌祭には存在し、日光の祭礼には存在しなかった。

### 3. 和歌祭の渡物

2021年(令和3)の和歌祭で棒振り、獅子、童子が復興されることになった。ここではこの復興芸能が、渡御行列でどのような役割を担うのかを考察してみたい。これらの芸能は前掲の神輿を先導および露払いをする重要な役割を担う芸能である。しかし江戸時代後期から平成にかけていずれも失われていった。これらの芸能を史料中心に再検討してみたい。

#### 3.1 天狗(王の舞)と棒振り

日光では「天狗面かけし者一人」とあり、中世の渡御行列の先頭によく見られる「王の舞」であると考えられる<sup>[22]</sup>。「東照社縁起」にもその姿が描かれており、烏兜に鼻高面、そして右手に鉦を携えている。小松茂美の解説では「赤い袍の楽人」として「面を付けている。これは振鉦を舞う人長(楽人の長)であろうか。」と記されている(小松編, 1994)<sup>[23]</sup>。この人物の前方には「烏甲着百人」であろう二行の10人が描かれており、それを「舞楽の楽人」としている。小松の解説ではその「人長」としているが、混同がみられる。ここに描かれた鼻高面の「王の舞」は田楽・獅子舞などととも中世の大社寺等で盛んに行なわれていた芸能である。その役割の多くは行列の先導を担っており、祭礼芸能の一環として田楽・獅子舞に先んじて演じられていた。なお、この芸能は福井県の若狭地方とくに多く残っており、前段は鉦を持ち、後段では素手での演舞で、橋本裕之はその特徴を「四方を鎮めるかのように舞う。反問の芸能化と理解することもできる。」と述べている(橋本, 1997)<sup>[24]</sup>。この芸能は近世にはすでに都では行なわれなくなっており、日光では神輿および行列の先導役として加わったことが考えられる。

和歌祭の創始期では、前掲の「和歌東照宮御祭礼之次第書」に王の舞にあたる芸能が黒棒と棒振りとして登場する。ここに登場する黒棒はこの史料以外には登

場しておらず、「黒装束」以外の情報は無い。なお棒振りはその後の史料にも登場しており、1646年(正保3)に描かれた住吉広通筆「東照宮縁起絵巻」五巻および1665年(寛文5)に描かれた「和歌御祭礼図屏風」(図1)には、面はつけず、烏甲ではなく頭巾を着している<sup>[25]</sup>。さらには鉦ではなく両端に房をつけた棒を持った姿で描かれている。この姿は王の舞とはほど遠い姿であった。なお、この棒振りは江戸時代中期にはさらに変貌をとげる。1783年(天明3)に描かれた「和歌祭行列之図」には、鬼面をつけ、片手に幣を持つ姿で描かれ<sup>[26]</sup>、またその姿は江戸時代後期のものとされる「東照宮御祭礼行列絵巻」にも描かれている<sup>[27]</sup>。そして1811年(文化8)の『紀伊国名所図会』以降は姿を消している<sup>[28]</sup>。この棒振りが和歌祭に受容された段階では、日光と同じく芸もなくただ渡御の先導役として加えられたものと考えられる。



図1 棒振り・獅子(「東照宮縁起絵巻」1646年(正保3))

しかし、和歌祭での棒振りは王の舞の系譜とは異にすることが考えられる。面をつけないこと、またつけたとしても鬼面であること、さらには鉦ではなく棒を持つことからわかるとおり、その姿も全く違うものとして絵画史料に登場している。和歌祭では、類似する練物が存在している。それが雑賀踊りの忠棒と請棒である。これらは雑賀踊りの先頭で警固の役割を担う鬼面をつけた棒振り踊りである。鬼面をつけた棒振りは近隣でも九度山町の椎出の鬼舞や大阪府堺市南区鉢ヶ峰寺の上神谷のこおどり等にもみられ、また三重県志摩市阿児町立神の盆行事のなかのささら踊りでは、入端おどりで鬼面の棒振りが先頭に立って踊り、そのあとにささら踊りが登場する事例がある(吉川, 2012)<sup>[29]</sup>。祇園祭の綾傘鉦や四條傘鉦では赤熊を被り覆面をした棒振り囃子が踊られる。これは寛文期(1661-73)に制作されたとする佛教大学所蔵の「洛中洛外図屏風」にも描かれており、当時都を中心にこの棒振り囃子が

踊られていたことが考えられる<sup>[30]</sup>。和歌祭の棒振りもこうした中世の王の舞ではなく、畿内の棒振りを取り入れたことが考えられる。

### 3.2 獅子

日光では「大獅子二匹」とあり、二頭の獅子が出ていたことがわかる<sup>[31]</sup>。この獅子は現在の日光東照宮の春秋の例祭でも登場しているが、芸能は行なわない。

獅子は612年（推古天皇20）に百済の人味摩之が桜井の子供に舞わせた伎楽での師子が日本での初出であり、『日本書紀』に記されている。この伎楽ではその冒頭に師子が舞われていたが、平安時代には衰退し、その後は大社寺の祭礼や法会の行道で行なわれるようになっていった。また、室町時代後期から江戸時代にかけては大神楽系獅子舞が西日本各地を回壇し、各地の檀那場で家々の寵祓いや悪魔払いをしながら、獅子舞や放下芸などを演じる大神楽系の獅子舞が盛んとなる。とくに三重県桑名市太夫を本拠地とする伊勢大神楽は各地の祭礼に影響をおよぼした（高嶋，2014）<sup>[32]</sup>。和歌山県内各地に残る獅子舞もこの大神楽系獅子舞である。

東照宮祭礼に登場する獅子はこの大神楽系獅子舞ではなく、前者の大社寺の祭礼や法会の行道で行なわれる獅子であった。そのため、その芸よりも神輿の露払いを務める役割の方が重視される。この芸態をもつ獅子は和歌山県下ではほかに粉河祭にもみられる。

和歌祭の獅子は日光と同様に2頭であったことが考えられる。創始期の「和歌東照宮御祭礼之次第書」には「三人 獅子」とのみ記されているため、その様子はわからない<sup>[33]</sup>。また、1646年（正保3）の「東照宮縁起絵巻」五巻には2頭の獅子が描かれている<sup>[34]</sup>。

しかし、それ以降の獅子は1頭で描かれるようになり、江戸時代の早い段階で1頭に変更されたことが考えられる。なお、紀州東照宮には2頭の獅子頭が保存されており、1つはその箱書きには1856年（安政4）4月の銘が入っている<sup>[35]</sup>。この獅子頭はこの記録年に新調されたものと考えられ、江戸時代後期の「東照宮御祭礼行列絵巻」、1921年（大正10）の榎本遊谷筆「和歌祭図」に描かれた獅子と類似する<sup>[36]</sup>。なおもう1頭は戦後に新調したものと考えられる。この獅子は戦後明光通商店街によって平成まで維持されていたが、少子・高齢化が重なり、近年断絶していた。

### 3.3 童子

日光では3カ所にわたって「児」・「童子」として登場する。1つは武者行列と社人の間で、「次に兒廿人二行。剪綵花を簪とす。左は黒縹子の直垂。右は赤縹子

の直垂。様々の縫物す。」と記されており、また「御旗」のあとに「次に猿面をかけ。猩々皮の羽織きたる童子卅八人。」として猿面の童子が登場する。そしてもう1カ所は獅子の後に続いており、「兒八人二行。冠に金欄の直垂を着す。次に兒五十人。烏甲に剪綵花をさしはさむ。次に大太鼓二。次に鐘二。白張これをうつ。」とあり、天冠に金欄の直垂を着た8人の稚児とその後方に50人もの稚児が鳥兜に造花を挟んで登場している<sup>[37]</sup>。このように日光の小祥祭には総勢100人を越える稚児・童子が登場している。この稚児は童子のことを指していると考えられ、和歌祭では創始期の「和歌東照宮御祭礼之次第書」に「一六人 とくじ」と記されている<sup>[38]</sup>。この「とくじ」は「どうじ（童子）」のことだと考えられ、祭礼行列としては中世以来さまざまな大社寺の祭礼に登場している。祭礼での童子の役割については小山聡子が中世前期の賀茂祭等の考察から「行列全体を穢れから守護し、穢れを祓う役割を担っていた」としている（小山，2003）<sup>[39]</sup>。和歌祭の童子は「後の渡物」の神輿の直前に配されており、小山のいう神輿の「穢れから守護し、穢れを祓う役割」を担っていたものと考えられる。それが日光では稚児行列の華やかさも相まって行列全体にわたってその役割を担うようになったと考えられる。

なお和歌祭の創始期の「和歌東照宮御祭礼之次第」、および1646年（正保3）「東照宮縁起絵巻」五巻には「童子」とのみ記され、描かれていた<sup>[40]</sup>。しかし、寛文期（1661-73年）以降の祭礼では「大童子」、「中童子」、「小童子」とわけて記されているものも見られる（「わかまつり絵巻」（1661年（寛文元）カ）、「和歌御祭礼御絵図」（1665年以前）、「和歌御祭礼御増書」（1665年（寛文5）カ）、『和歌浦物語』（1739年（元文4））、「和歌祭行列之図」（1783年（天明3））<sup>[41]</sup>。この三種の「童子」は、中世の祭礼行列では役割が違っていったようで、鎌倉時代初期に成立した『貴嶺問答』には「号大童子者。年齢及七旬。如載露瓶。白髪纒ニ残ル。頃極見苦者也。」と記されており、この記述から小山は「頭の禿げ上がった大童子は、仏菩薩に侍る端正な顔立ちをした童子とはほど遠い存在であり、その衣装からも行列を荘厳する役割を与えられていなかったのではないかと述べている（小山，2003）。また小山は、鎌倉時代中期に成立した『光台院御室伝』の1206年（建永元）10月26日条の第8代光台院御室の受戒時の行列に「大童子卅人」が加わっていることと、大童子が散所を引き連れ統括する役割を担っていたとする土谷恵の指摘をあげて、散所と同様に穢れを浄める役割があったとしている（小山，2003）<sup>[42]</sup>。このこ



図2 童子（「東照宮縁起絵巻」1646年（正保3））

とはいずれも小山のいう童子の役割である「穢れから守護し、穢れを祓う役割」に帰着する。江戸時代にはこの職掌の違いの要素が薄れ、渡御行列を荘厳する役割がより一層強調されるようになっていったと考えられる。それを示すかのように上記の絵図には、「大童子」、「中童子」、「小童子」のそれぞれの装束は同様に描かれ、単に体格の違いが表現されている。

この童子は明治以降の行列立てには記されておらず、明治以降は断絶したものと考えられる。2021年の復興では「東照宮縁起絵巻」五巻（図2）をもとに9人の童子を復興する予定である。

このように3種の渡物は和歌祭だけでなく、東照宮祭礼の渡御行列の重要な役割を担っており、和歌祭四百年大祭で注目されるだけでなく今後の和歌祭においても、神事性の観点から歴史的・文化的価値付けで重要な要素であるといえよう。2021年の復興では比較的東照宮祭礼の祭式を残している和歌祭の絵巻である「東照宮縁起絵巻」五巻をもとに1人の棒振り、2頭の獅子、そして9人の童子を復興する。

#### 4. おわりに

和歌祭は2022年に四百年式年大祭を迎える。ここで取りあげた棒振り、獅子、童子の復興（図3・4）はその記念事業の一環として行なわれたものである。

戦後、1948年（昭和23）にミナト祭として、また翌1949年（昭和24）に和歌山市の商工まつりの花形として和歌祭が復興されたが、祭礼のフェスティバル化による御旅所の喪失、またパレード化による諸芸能の喪失が相次ぎ、和歌祭自体が解体の危機に瀕していた。これは「祭礼」としての存続だけでなく和歌祭の存続の危機でもあった。しかし、和歌祭保存会青年部（現実行委員会）の尽力によって、御旅所を元の御旅所の近くに設け、また渡御コースも近いルートにもどすことになった。このことは和歌祭の文化的・歴史的価値を高める結果につながり、2010年（平成22）には

御船歌、2012年（平成23）には餅搗き踊り囃子方、そして2017年（平成29）には唐人の復興につながっていく。一方和歌山城周辺での和歌祭がなくなり、和歌祭が「和歌浦地区のお祭り」という認識が芽生えだし、旧城下町を挙げた大祭ということすら忘れられつつある。先述のとおり、四百年大祭は、神事性をともなった戦前以前の和歌祭と、商工まつりで行なわれていた和歌山城周辺への「行列」を融合させた計画となっている。また、復興芸能である棒振りおよび獅子は和歌山市関戸の株式会社南北が、また童子は和歌山市立和歌浦小学校の有志が新たに担うことになった。少子・高齢化が進展するなかで、こうした企業や学校が地域の文化を担う期待が高まりつつある。

2022年の大祭にはさらに練物の復興を計画している。こうした芸能の担い手を旧城下町に拡げていくことで、認知度だけでなく、「自分たちの祭り」という自覚が旧城下町全体に拡がることも期待したい。



図3 復興された棒振り・獅子  
（和歌山市駅前広場リニューアル記念イベント）2021.3.28



図4 復興された童子  
（キーノ和歌山和歌祭定期公演）2021.3.28

- [1] 近・現代の和歌祭は米田頼司 (2010) 『和歌祭一風流の祭典の社会誌』帯伊書店に詳しい。
- [2] 東照社は1645年(正保2)の宮号宣下により東照宮となった。
- [3] 「台徳院殿御実記」(黒板勝美・国史大系編修會編(1964)『新訂増補 国史大系』39, 徳川實記第二編, 吉川弘文館), 崇伝「本光国師日記」4(副島種経校訂(1970)『新訂 本光国師日記』4, 続群書類従完成会), 梵瞬「舜旧記」2(鎌田純一校訂(2014)『史料纂集』古記録, 八木書店)。
- [4] 註3, 崇伝「本光国師日記」4参照。
- [5] 山王神道に関しては天台宗典編纂所編(1999)『天台宗全書』山王神道, 春秋社をはじめとして, 嵯峨井建(1992)『日吉大社と山王権現』人文書院, また村山修一(1994)『比叡山史 闘いと祈りの聖域』東京美術など多くの研究成果がある。
- [6] 山王一実神道に関しては, 宗教史的側面からの論考は, おもに天海と家康における幕府の天台宗の教義受容の観点で行なわれてきた。主要な論考は曾根原理(1996)『徳川家康神格化への道』吉川弘文館をはじめ, 圭室文雄編(2004)『日本の名僧一五 政界の導者 天海・崇伝』吉川弘文館, 菅原信海・田邊三郎助編(2011)『日光 その歴史と宗教』春秋社, 菅原(2013)『神と仏のはざま 家康と天海』春秋社など多数存在している。
- [7] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [8] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [9] 小祥祭の渡御行列に関連した論考は高藤晴俊(2002)「東照社縁起に描かれた祭礼行列」『下野民俗』42, 下野民俗研究会, 高藤(2003)「日光東照宮の神輿渡御行列について—その成立過程の考察を中心として—」『儀礼文化』32, 儀礼文化学会)などが挙げられる。また内藤正敏(2007)『江戸・王権のコスモロジー』, 法政大学出版局では渡御行列を神馬グループ=芸能民の呪力の守護, 神器グループ=武力と社人による守護, 神輿グループ=猿面・猿牽, 鷹匠による徳川王権の草創神話劇に分類し, 呪術的設計であったとする説も存在する。
- [10] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [11] 「日光祭典沿革攷」1863年(文久3), 東照宮文庫蔵。
- [12] 「東照社縁起」小松茂美編(1994)『続々日本絵巻大成』伝記・縁起8, 中央公論社。
- [13] 註9高藤(2003)参照。
- [14] 山路興造(2013)「東照宮の成立—和歌山東照宮祭を中心として—」『民俗芸能研究』54, 民俗芸能学会参照。
- [15] 常行三昧堂修正会での田楽については吉村旭輝(2011)「摩多羅神祭における田楽の役割—中世天台系寺院の修正会を中心として—」『日本文化史研究』42, 帝塚山大学奈良学総合研究所ですでに論考をしている。
- [16] 「耀天記」(1223年(貞応2)) (神道大系編纂会編(1983)『神道大系』神社編29 日吉, 神道大系編纂会)には, 八王子が8人の童子形であり, それが大宮を田楽で饗応したことが所々に記されている。
- [17] 「和歌東照宮御祭礼之次第書(写)」1778年(安永7)写, 雲蓋院文書(雲蓋院蔵)。本文書は写ではあるが, 1622年の和歌祭創始期の行列記録を比較的正確に写したものとされ, 米田(2010)をはじめとする多くの和歌祭の研究で使用されている。しかし正確な原本の確認も今後必要となる。
- [18] 豊国神社臨時祭礼に関する先行研究は主要なものとして以下の論考を挙げることができる。高尾一彦(1969)『国民の歴史』13 江戸幕府, 文英堂, 大桑斉(1983)「天正寺の創建・中絶から大仏造営へ—天正期豊臣政権と仏教—」『大谷学報』63-2, 大谷学会, 三鬼清一郎(1987)「豊国社の造営に関する一考察」『名大文論集』XCV III, 名古屋大学文学部, 河内将芳(1998)「京都東山大仏千僧会について—中近世移行期における権力と宗教—」『日本史研究』425, 日本史研究会, 河内将芳(1999)「豊国社成立過程について—秀吉神格化をめぐる—」『ヒストリア』164, 大阪歴史学会など。
- [19] 倉地克直(1996)『近世の民衆と支配思想』柏書房参照。
- [20] 註17参照。
- [21] 吉村(2017)「徳川頼宣と天海による東照社(宮)祭礼の創始—東照社小祥祭と和歌祭を中心として—」名勝和歌の浦 玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ名勝和歌の浦 名勝和歌の浦 玉津島保存会参照。
- [22] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [23] 註12参照。
- [24] 橋本裕之(1997)『王の舞の民俗学的研究』ひつじ書房参照。
- [25] 住吉広通筆「東照宮縁起絵巻」5巻, 1646年(正保3), 紀州東照宮蔵。
- [26] 「和歌祭行列之図」1783年(天明3), 個人蔵。
- [27] 「東照宮御祭礼行列絵巻」江戸時代後期, 國學院大學神道資料館蔵。
- [28] 高市志友編「紀伊国名所図会」, 1811年(文化8)(高市志友編(1970)『紀伊国名所図会』1, 歴史図書社所収。)



- [29] 吉川壽洋 (2012) 「和歌祭とその芸能―雑賀踊」『「風流の大祭・和歌祭とその芸能」講演記録集』和歌山市伝統文化活性化実行委員会に雑賀踊の棒振りに類似する鬼の棒振り芸能について紹介されている。
- [30] 「洛中洛外図屏風」寛文期 (1661-73), 佛教大学蔵。
- [31] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [32] 獅子舞の研究は多々存在するが、その概要については高嶋賢二 (2014) 「奈良県の獅子舞―伊勢大神楽と伊賀の獅子神楽をめぐって―」奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能 奈良県民俗芸能緊急調査報告書』奈良県教育委員会を参照した。
- [32] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [34] 註24参照。
- [35] 「獅子頭」1856年 (安政4), 紀州東照宮蔵。
- [36] 前者は註26参照。後者は榎本遊谷筆「和歌祭図」1921年 (大正10), 個人蔵。
- [37] 註3「台徳院殿御実記」参照。
- [38] 註17参照。
- [39] 小山聡子 (2003) 「祭礼行列における童子の職掌―中世前期を中心として―」『国際日本文学研究集会会議録』26, 国文学研究資料館参照。
- [40] 註17および24参照。
- [41] 「わかまつり絵巻」1661年 (寛文元) ヲ, 和歌山市立博物館蔵, 「和歌御祭礼御絵図」(1665年以前), 「和歌御祭礼御増書」1665年 (寛文5) ヲ, 個人蔵, 『和歌浦物語』1739年 (元文4), 和歌山大学図書館蔵。
- [42] 註38参照。